
編者紹介

◎安部 清哉 (あべ せいや)

フェリス女学院大学教授、同大学院教授。東北大学大学院文学研究科単位修得。

日本語学・方言学・言語学。1958・7、宮城県生まれ。

[主要業績]

『概説日本語の歴史』(朝倉書店、共著、1995)、『日本語研究法 古代語編』(おうふう社、共著、1998)、『方言の読本』(小学館、共著、1991)、『日本語のルーツを探ったら』(アリス館、単著、1997)

'Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects',

Proceedings of 2nd International Congress of Dialectologists & Giolinguists,

1997・7・28~8・1, Vrije Univ.in Amsterdam, The International Society for

Dialectology and Giolinguistics.

安部 清哉 (A B E S e i y a)

1958年7月19日 宮城県仙台市生まれ

1986年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程後期単位修得中途退学

1986年4月 東北大学文学部助手(国語学研究室)

1997年4月より フェリス女学院大学教授

現在 フェリス女学院大学教授、同大学院教授、日本語学・方言学・言語学専攻

住所 〒235-0033 横浜市磯子区杉田8-15-10 E-mail seiya@edu.ferris.ac.jp

『概説日本語の歴史』(朝倉書店、共著、1995)

『日本語研究法 古代語編』(おうふう社、共著、1998)

『方言の読本』(小学館、共著、1991)

『日本語のルーツを探ったら』(アリス館、単著、1997)

ABE Seiya(1997・7・28) 'Several Strata in the Historical Formation of Japanese

Dialects'(cf.Proceedings & hand outs), 2nd International Congress of

Dialectologists & Giolinguists, 1997・7・28~8・1, The International Society for

Amsterdam, Holland (国際方言学地理言語学会 口頭発表)

ABE Seiya(1999・8・5) 'Cimate, Culture and Language', (cf.Proceedings & hand outs) ,

12th World Congress of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo), August 1-6, 1999,

Waseda Univ., Tokyo, Japan, (第12回国際応用言語学会世界大会 口頭発表)

《フェリス女学院大学・共同研究 BOOKLET 2003》

『日本語-セブアノ語(ビサヤ語)-英語 対照基礎語彙集 5000 』

“Japanese-Sebuano (Bisayan)-English Lexicon of Basic Words 5000”

編 者：安 部 清 哉 ABE Seiya

発行年：2003年 3月 31日 発行 初版

発 行：フェリス女学院大学文学部 安部研究室
〒245-8650 TEL+81-(0)45-812-8211(代)
日本国神奈川県横浜市泉区緑園4-5-3

連絡先：学習院大学 文学部 安部清哉研究室
〒171-8588 TEL+81-(0)3-3986-0221(代)
日本国 東京都豊島区目白 1-5-1
GAKUSHUIN UNIV. Faculty of Literature
1-5-1, Medziro, Toshima-ku, Tokyo, JAPAN

頒 価：¥3,000- （一部は「海外に日本語教材を送る会」に寄付される）

《フェリス女学院大学・共同研究 BOOKLET 2003》

日本語－セブアノ語（ビサヤ語）－英語

対 照 基 礎 語 彙 集 5000

Japanese - Sebuano (Bisayan) - English

Lexicon of Basic Words 5000

安 部 清 哉 編

A B E S e i y a ed.

2003・3

フェリス女学院大学文学部

FERRIS UNIV.

YOKOHAMA・JAPAN

「日本語－セブアノ語（ビサヤ語）－英語 対照基礎語彙集 5000」

安部 清哉

1、はじめにー本・基礎語彙集の位置

本基礎語彙表は、セブアノ語（ビサヤ語）[Sebuano, Cebuano (Bisayan, Visayan)]の基礎語彙を見るために、日本語を見出しとして対照させた「日－セブ小語彙集」である。利用の便のため、英語の訳語も添えたものである。

日本におけるセブアノ語の単語集として、一般に見ることのできるものとしては、管見の限りでは次のものがあるくらいである。

シンシア・ザヤス、山下美知子編『セブアノ語会話練習帳』（昭和59・10、大学書林）

これは会話集としてまとめられていることもあり、単語欄に掲載されているのは合計で約400語ほどである。会話部分に出ている単語を含めたとしても、おそらく1000語程度と思われる。

本「語彙集」における日本語見出し語形の掲載単語は約5000語である。セブアノ語（また英語も）の該当訳語は類義語など複数掲載されているので、総計は、日本語の掲載単語数を上回る。現在、日本語から検察できる「日－セブアノ語彙集」としては最大の掲載語と思われる。

そのように、日本でのセブアノ語の言語学的基礎資料が少ないようであるので（注1）、不十分なものであるが、ここに公表しておくことにしたものである（注2）。

なお、本語彙集は、安部清哉（2001・11）「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」（フェリス女学院大学国文学会『玉藻』37）で言及した「オーストロ・ユーラシア言語地図」を作成するための資料として作成したものでもある（〔付記〕参照）。

なお、表記法の不統一、記号処理の不徹底、また、単語が多く必ずしも十分な時間ではなかったこともあり、思わぬ入力ミスや機械処理上のミスなど、不十分なところも少なくないものと危惧する。大方のご教示をいただければ幸いです。

2、セブアノ語（ビサヤ語）紹介

Sebuano (Cebuano)[or Bisayan (Visayan)]語は、フィリピン諸語の1つで、話者数において、タガログ語とほぼ同数の話者人口をもつ言語である。1975年国勢調査時点では、全人口の24.4%であり、それはタガログ語をわずかに凌いで、フィリピンの第1の話者人口をもった言語という（『言語学大辞典』）。

タガログ語と異なり、話者人口に比して日本での知名度がほとんどないのは、フィリピンの国語であるフィリピン語がタガログ語を基本として形成されたものであり、また、そのフィリピン語が、首都のマニラなどで使用され教育言語としても採用されていること、これらのこともあって、実際に、タガログ語の方がコミュニケーション上優位にあること、などが影響しているためであろう。

言語系統は、オーストロネシア語族－ヘスペロネシア語派－中央フィリピン諸語－中部フィリピン語群－南ビサヤ小語群に属する言語であり、フィリピンのセブ州、ネグロス・オリエンタル州、ボホル州、レイテ州南西半分、ミンダナオ島北部沿岸地域に分布する言語である（『言語学大辞典』）。つまり、フィリピンのおよそ中南部に広く分布して通用する言語ということがわかる。

セブアノ語は、現地での自称名は、Binisay、Bisay（民族名でもある）であり、本語彙表の協力者のメリー・シェリルさんも「ビサヤ（語）」という名称を使っている。ビサヤ語は、セブアノ語以外の言語も含む包括名であるようで

あるが (『言語学大辞典』)、現地自称名であることと協力者の使用名でもあるので、ここでは括弧に入れて併記した。

3、凡 例 (抄録)

(1) 本語彙表は、日本語の基礎語彙約 5000 語に対応するセブアノ語 (ビサヤ語) を掲載 した語彙集である。日本語のローマ字綴りのアルファベット順 (ABC 順) によって配 列され、日本語のそれぞれの行ごとに次の順に配列されている。

1 列目 日本語のローマ字表記 / 日本語の平仮名表記 (漢字)

2 列目 英語 (日本語に対応する類義語がある場合は「;」を挟んで併記。その他、記号については

(3) 参照)

3 列目 セブアノ語 (ビサヤ語) (複数ある場合や記号については (3) 参照)

(2) セブアノ語に類義語等がある場合は、原則としては、次のように記号を付して区別 した。

①日本語に対応する同義語ないし類義語がある場合は、原則として、セミコロン [;] を 挟んで併記した (英語も同様)。

例 abareru / あばれる riot(v.) rayot:gubut

②日本語に対応する英訳に 2 つ以上の単語が当たっていて、そのそれぞれの英語に対応す るセブアノ語がある場合、対応する英語とセブアノ語には、同じ数のアルタリスク [*、 **,***,*~] を付して、その対応関係を示した。

例 aite / あいて *opponent : **partner *kontra : **pares

これは、日本語の「相手」に対して、opponent の意味では kontra が該当し、part ner の意味では pares が該当することを示す。次のような、3 語以上でも同様である。

例 atsui / あつい

*hot : **thick : ***warm(a.)

*init : **baga : ***alimuot ; igang

最後の warm の意味では、alimuot と igang が該当することを示す。このように、同 じ意味でも後掲の単語の記号 (ここでは***) を省略した場合がある (④参照)。(但し、①の単なる同義語・類義語記号 [;] としての併記の場合もある。)

③英語の訳語に複数あり、そのいずれかに対応するようなセブアノ語がある場合には、対 応する単語に同じ数の [*] 印を付して示した。記号がないものは、(特定の対応語の ない) 単なる同義語・類義語関係である。

例 au / あう *fit;meet;see *bagay;kita;mag kita

これは、bagay が fit と同じ意味であることを示す。一方、kita や mag kita は meet や see の意味であることを示す。

④英語との同義を表す [*] 印付き単語が複数ある場合、それぞれと同じ意味でさらに複 数の単語がある場合は、その [*~] 印以下に [;] 印で併記してある。

例 azukaru／あずかる *keep;*participate *hiposon:**mo-apil;mopartisipar

これは、hiposon が keep と同じ意味であり、mo-apil や mopartisipar が participate と同じ意味であることを示す。

⑤日本語に対応するような適当な 1 単語がない場合、該当する句・表現や説明的表現、ないし内容的に該当する複数単語の羅列、などによって示したことがある。原則的に、それらは [“～”] 印に入れて示されている。

例 gomenkudasai／ごめんください [感]
May I come in ! ; Excuse me !
“Ayu,pwede mosulod ! ; Ayu !”

例 hakimono／はきもの foot-wear “sapatos,tsinelas,sandal”

⑥まれに該当する物や単語がない場合、[*****] 等を示し単語の記入がない。

例 geta／げた Japanese wooden clogs *****

(3) 本語彙表のセブアノ語 (ビサヤ語) は、メリー・シェリル・M・サルドン (注2参照) による。

◎メリー・シェリル・マラタス・サルドン略歴

本語彙表の協力者であるメリー・シェリル・マラタス・サルドン (Mary Sheryl Maratas Saldon) は、1982 年に、フィリピンの Dipolog City に、Oscar H. Saldon 氏と Visminda M. Saldon さんの娘として生まれた。Dipolog City の、小学校では卒業生総代となり、中学校を優秀な成績で卒業した。その後、シリマン (Silliman) 大学の生物学を専攻する学生として籍を置き、2000 年 10 月から 2001 年 7 月まで、協定校であるフェリス女学院大学国際交流学部に交換留学生として留学した。現在は、シリマン大学に戻り勉学を続けている (注3)。

(なお、言語研究上のデータとして、ご本人及びご両親の言語的経歴についても詳しく教えていただいているが、ここでは省略する。)

(4) なお、本語彙表のうち、日本語－英語の部分は、次のものを利用させていただいている。そのことを明記し、京都橘女子大学「海外に日本語教材を送る会」、及び、その顧問でデータ・ファイルをご提供くださった宮島達夫先生 (現在、京都橘女子大学・客員教授) に御礼申し上げます。

◎京都橘女子大学「海外に日本語教材を送る会」編『入門日本語辞典』(私家版、試用版 1997・10、縮小版 1998・11、本語彙表は 2001・1 版の F D 版による)

[注]

注 1、『言語学大辞典』(三省堂)「セブアノ語」の参考文献一覧においては日本語の文献・辞書は見られない。

注 2、協力者のメリー・シェリルさんは、フェリス女学院大学の協定校であるシリマン (Silliman) 大学 (フィリピン・ドゥマゲテーシティ、フェリス女学院大学には毎年 1～2 名の留学生がある) からの交換留学生 (2000・10～2001・7) である。勉学にたいへん熱心な学生で、この小さな辞書の構想に対して、授業単位にもならないにもかかわらず、とても積極的に協力してくれたものである。

正書法の問題と地域差 (方言) の問題なども考慮されたので、その点を克服すべく、また、その後に継続する留学生な

どによる補足なども予定していたものであった。この3月での編者の異動もあって、今後シリマン大学留学生との継続的作業も難しくなることもあり、不十分なところも残るが、メリーさんとの縁となったフェリス女学院大学に所属しているうちに公表しておくことにしたものである。

注3、メリー・シェリルさんによれば、日本への留学前、フィリピンの大学での日本語の学習はプリントなどで行われ、当時は辞書や教科書のようなものも使用していなかったという。その後は事情も異なろうが、教材として簡単な辞書でもあれば、フィリピンのセブアノ語地域での日本語学習・日本語教育にも便利であろうと思われた。上記のように、日本でセブアノ語の辞書もないようであることもあり、また、付記の研究におけるオーストロネシア語の基礎的研究の一環とも関わらせて小語彙集を編むことにしたものである。

[追記] 本語彙集は、次の研究費による研究成果の一部でもある。紙幅を取る本語彙表を掲載していただいたフェリス女学院大学文学部に感謝申し添える。

①2002年度フェリス女学院大学共同研究「東アジアにおける異文化接触と文化・言語・コミュニケーションの受容・変容に関する基礎的研究」(代表者：安部清哉)

②平成13・14年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「日本語の方言分布境界線(関越線・気候線)による方言の重層性に関する基礎的研究」(課題番号13610492、代表者・安部)